２９「ピトケアン島」

もう１０年以上前のことになるが、テレビのドキュメンタリー番組で「ピトケアン島」が取り上げられていた。レポーターの時任三郎は、大変な航海の末現地にたどり着き、その時の番組と彼の滞在記録がとても印象に残っている。

その後島はどうなったのだろうか？島民たちのその後が気になった。
当時のレポートを基に、現時点で知りうる新しい情報を加えながら、自分なりに書いてみたいと思う。

ピトケアン島には、とてもドラマチックな物語がある。それは映画や小説でも有名な「バウンティ号の反乱」にまつわる物語だ。

１８世紀の終わり頃、イギリスは黒人奴隷により西インド諸島の開拓を進めていた。その主なものは砂糖栽培のプランテーション経営である。労働者の食糧は、北アメリカのイギリス植民地からの輸入に頼っていた。

１，７７５年アメリカ独立戦争が始まると、西インド諸島への食糧供給が途絶えてしまう。

そこでイギリスが着目したのが、キャプテン・クックの航海誌で紹介されていた南太平洋のパンの木である。

西インド諸島の食糧問題解決の任務にあたったのが、艦長ウイリアム・ブライ（William Bligh）の率いる帆船バウンティ号だった。

１，７８７年、イギリスを出航した帆船バウンティ号は２年後にタヒチでパンの木の苗木を積み込んで西インド諸島へ向かったが、１，７９０年トンガ沖を航海中に水兵達の反乱が起きた。今から２２０年前、フランス革命の頃である。

艦長ブライの厳しすぎるやり方に耐えかねた、副艦長クリスチャン・フレッチヤー（Christian Fletcher）と乗組員１７名が、艦長と彼に味方する１８人の乗組員を小舟に乗せて追放したのである。

フレッチヤーと乗組員はその後タヒチに着き、何人かの乗組員はそこに残った。

ピトケアン島の位置

フレッチヤーたちは、タヒチで女を含む１０数人の現地人を拉致して太平洋をさまよったあげく、そこから約２，０００km離れた無人島「ピトケアン島」にたどりついた。

反乱を起こした者は死刑を免れることができないので、イギリス本国には帰ることかでさない。
彼らはその島に住む覚悟を決めた。

追放されたブライ艦長達は、４８日間５，６００kmに及ぶ漂流の末、奇跡的に当時のオランダ領マレー群島のチモール島に漂着、その後イギリス本国に戻る。

ブライ艦長自身は、後に別の任務においても反乱にあう。最終的にはオーストラリアのニューサウスウエールズの総督になるが、そこでも現地の有力者と対立し、配下の治安部隊が反乱を起こし軟禁事件を引き起こす。これを見ると、本人に何らかの人格的な問題があったのではないかと思われる。

一方、タヒチに居残った反乱者達は、酋長の傭兵として仕え島の統一に大きな役割を果たすことになる。しかし、後にイギリスから派遣された軍艦パンドラ号により逮捕されてしまう。

その後、パンドラ号はフレッチヤー達を捜しながらの航海中、オーストラリア東側の近海で座礁し沈没した。その時、檻に入れられていた１０数名のうち３名か水死。残った逮捕者は別の軍艦でイギリスに帰国したが、裁判にかけられ３名が絞首刑となった。

さて、この物語の中心フレッチャーとその仲間が逃げこんだピトケアン島である。

ピトケアン島は、タヒチとイースター島の中間に位置し、切り立った崖に囲まれた周囲１０ｋｍにも満たない小さな火山島だ。

以前ピトケアン島にはポリネシア系の人々が住んでいたが、この時は既に無人島だった。島に上陸できる揚所はほとんどなく、人をまったく寄せ付けない雰囲気をもった島である。

本国イギリスからの追跡を恐れたフレッチャーは、船の近づきにくいこの島を選んだのである。

そして、発見されないよう、自らバウンティ号を焼却処分してしまった。

この島で自給自足の生活に入ったが、彼らの暮らしは波乱の連続だった。

人が生きていくための最低限の条件である「水」は、幸い島が雨の多かったことで確保された。

暮らし始めた当初、反逆者達はタヒチから連れてきた女性達を、それぞれ一人ずつにあてがっていた。タヒチから来た男達には、残りの女性を共有させていたという。

ある時、病気で妻を失った一人が、なかば強制的にタヒチの男から女を奪ってしまった。これが原因となって、白人対タヒチ人の抗争が始まった。それまで白人達はタヒチ人を奴隷のように扱っていたので、彼らには普段から白人に対して鬱憤がたまっていたのである。

ピトケアンに来た当初は、家の建設から食へ物の確保まで相当タヒチ人の世話になっていたはずである。にもかかわらず、白人から奴隷のような扱いを受け、しかも女まで奪われたタヒチの男達の怒りは相当なものだったろう。

そして恨みが頂点に達して、殺し合いにまで発展した。反逆者達が島にたどり着いてから１８年後、アメリカの捕鯨船が彼らを発見した時には、９名の女性と２３人の子供、そしてたった一人の白人の男か残っていただけだという。

一人生き残った白人はジョン・アダムス、あまり目立たない男だったらしい。彼は一冊の聖書を基に、島の規律を作り上げた。教会を作り、毎週礼拝の時間も設けた。

島での忌まわしい過去を繰り返さないために、タロイモによる酒造も禁止。それ以来、飲酒の習慣がなくなっていったという。

英語を話すのは彼一人だったが、たった一冊の聖書を使って人々に英語の読み書きを教えた。

現在この島の言葉は英語と現地語の混成語クレオール語（英語，フランス語，スペイン語などと現地語が混合して作られた言語）である。

度秩序がなくなると、社会というものはとことん衰退してしまう。しかし、一度争いにより失われた秩序だったが、アダムスの努力の甲斐あって何とか回復した。

社会には良くも悪くも、権力と規律による統治が必要なのである。

ピトケアン島はイギリス領ということになっている。島の人々は基本的にはイギリス国籍であるが、イギリス本国に行くには特別なビザが必要である。

財政も独立採算で、本国の税金体系から切り離されている。従って、人々は精神的な面では「イギリス国民」という意識は薄い。それよりも、地理的経済的に密接な関係を持っているニュージーランドに

対して親近感があるのは当然である。
　現在この島に行くには２通りの方法かある。
　１つはニュージーランドのオークランドから貨物船に乗って行く方法で、片道約１週間かかる。ただし、帰りも貨物船で帰ろうとすると、最低１ヶ月は島で待たなければならない。
　もう１つはタヒチから南西方向に約１，３００ｋｍ離れたフランス領カンビエ諸島のマンガレバ島まで飛行機で行き、そこから貨客船で行く方法で約一日半かかる。ただし年に８便しかないので、急ぐ場合はそこからヨットなどのチャーター船で行くしかない。
　ピトケアン島には、今でも反乱者の子孫たち５０名ほどが暮らし続けている。子孫たちは、食糧や土地問題のため一時島を離れて、ノーフォーク島という島に集団移住したこともあった。しかし、再び戻り今でもこの”絶海の孤島”で生活している。
　現在でも島の生活は、ほとんどを外からの物資に頼っている。ただ、水は飲用も生活用水もすべて雨水である。
　物資はニュージーランドから北米へ向けたブルースターラインという、貨物船の定期航路が３ヶ月に一度、沖合いに停泊。アメリカからの帰りも寄港するので、合計年に８回の便があることになる。
　大きい船は島には近つけないので、予め無線などで注文しておいた物資を全部島に揚げるのに、小船で１０回以上往復しなければならない。さらに港から各家庭、あるいは共有の倉庫や売店まで物資を人手で運ばなくてはならない。
　この島の主な収入源は、切手の売上げと木彫製品や蜂蜜の販売だ。木彫製品は客船や貨物船が島に寄港したときに土産として売るのは勿論、インターネットを通じて通信販売もしている。
　１０歳＜らいの子供達から老人まで、この島の人達はほとんどが木彫の”職人”であると言ってもいいくらいだ。
　島の電気は大きなディーゼル発電機によって、各家庭に配電されている。ただし朝は９時から１２時までと、夜は午後５時から１０時までだ。
　ほとんどの家には巨大な冷蔵庫があり、冷凍食品がびっしりと積め込まれている。冷蔵庫の普及は、外部からの物資の供給がめったにないという事情からである。
　島にラジオ放送，テレビ放送はないが、衛星放送は見ることができ、テレビとＤＶＤもほとんどの家庭に普及している。衛星回線により、電話とインターネットが利用でき普及率１００％である。

　反乱を起こした者と反乱を起こされた者、タヒチに残った者、そしてピトケアン島に逃げ込んだ者。バウンティ号の反乱から分かれた３つの運命。
　それぞれがそれぞれの思いでたどった道は、決して楽なものではなかった。そして、その子孫たちのピトケアンでの暮らし。それもまた、とても厳しいものだったに違いない。

　今でこそ外からの物資が定期的に入るようになり、情報網が発達し、基本的には西洋人スタイルの生活をしているが問題も多い。
　外からの物資が豊富になればなるほど、大変な労力と費用をかけわざわざ物資を運び込まずに、いっそ人間が物資のある場所に行った方がいいという考えが出てくる。
　事実家族ごと集団で移住する人が増えている。それに、高等教育を受けるためにニュージーランドな

どに行った子供たちは帰ってこないケースが多い。

そして、その子供たちからの仕送りのある家庭と、ない家庭の貧富の差も出てくるだろう。「祖父や祖母がいるから」と言う理由だけで居残っている人もいる。

多くの人が島の未来に不安を感じている証拠に、出産はニュージーランドでするという人がほとんどである。それはニュージーランドの国籍を取得するためだ。

島民は飛行場の建設を強く望んでいる。計画は以前からあるが、資金的なメドが立たないためいつになるかわからない。飛行場は緊急の病人搬送や、観光客の誘致のため是非欲しい。しかし、そこまでしてこの島が存続しなければならない理由はあるのだろうか？

島の交通機関として活躍している４輪バギー。島の人は隣の家に行くだけでもそのバギーに乗っていく。「ちょっとコンビニまで」というのに、わざわざ車に乗っていく都会人と同じだ。

家庭には電化製品があふれ、調理やお湯を沸かすにも電気を便っている。

外からの物資が増え、パッキングに使われている素材はほとんどがプラスチックだ。そのためゴミが急激に増え、島ではゴミ処理，汚水や排水の問題に頭を悩ませている。

そうやって“都会化”していくことが、この島にとっていいことなのかどうか、それは誰にも判らない。今でも島の人々は「一つの大きな家族」のような共同体としての生活を基本としている。そういう意識が島の人々にあるうちは、ピトケアン島は存続し続けるかも知れない。

しかし、これから先、各家庭の貧富の差が激しくなっていった場合、どこまで「一つの大きな家族」という意識を持ち続けることができるだろうか。

「反乱者の子孫」という意識も人々の結束を強める一つだと考えられるが、新しい世代の意識は少しずつ変化していると思われる。

ピトケアン島の人々

最近一つの大きな問題があった。１，９９９年研修に訪れていたイギリスの女性警察官が、島の女性から大部分の成人男性が１４歳以下の女性と性交渉をもっている、という事実を告げられた。

容疑者は、「これは島の風習であること、ピトケアン諸島はイギリスの主権下にはなく英国法に基づいて裁くのは憲法違反だ」と主張したが退けられた。

「容疑者」はこの島のほぼ全ての成人男性であり、島の経済は裁判の間大きく停滞する事になる。ましてや実刑判決が下れば、島の存続にも関わってくる。

一つの島が丸ごと消えてしまいかねない事件として、この出来事はイギリスやニュージーランドだけにとどまらず、世界中で大きく取り上げられることとなった。

イギリスの海外領土の住民が、イギリス連邦に属するとはいえ英国法によって裁かれるという変則的な形である。

２，００４年１０月２５日、ピトケアン島で裁判（少女性的暴行事件として扱われた）が行われ、最終的に７人の被告に対して６人が有罪、１人が無罪になった。

イギリスの主権が及ぶとなれば、この判決は止むを得ないということになる。

しかしポリネシアでは、１２歳から１５歳の間に出産することは特別なことではない。
成熟した先進民主国家の法律を、気候風土や生活習慣の全く異なる、孤島の住民に押し付けなくても良かったのではないかと多くの人が思うに違いない。
これまで世界戦略に成功を収め、世界に多くの規範を創ってきた国家としての威信だろうか？
イギリスはすでに斜陽の国家、私としては、過去の威光を振りかざして空威張りしていると思えて仕方なかった。

バウンティ号から始まったこの２００年余りの出来事は、我々に多くの事を考えさせてくれる。
国家とは何か，指導者とは，組織とは，法律とは，生きるとは，男とは，女とは，家族とは何か。
異文化との交流，民族間，人種間，男女間の差別問題。宗教，教育の問題，都会と地方の問題。大量消費社会の抱える問題。
このように考えていくと、これは、実は人類が抱えている問題そのものであることに気付く。
この先ピトケアン島は、人がいなくなって再び無人島になるかも知れない。そして、またいつか人が住み着くかもしれない。
このバウンティ号の反乱とピトケアン島をめぐる人々の壮絶な戦いの歴史は、人類の未来を暗示しているとも思え、決して忘れ去られるようなことがあってはならない。
（２０１１．１０．２５）